

前号を読んで

センターへの期待

青木貞雄
物理工学系教授

筆者は平成7年から4年間、工作センター長を併任した関係で、前号の特集「センターにおける教育・研究」を興味深く読ませて頂きました。当時から改革・再編については、他のセンターでも話題になっていましたが、日常業務に追われる研究支援センターの再編は難しいとの雰囲気でした。しかしながら、このような状況も法人化で一変したようです。特集号でも、それらに関する話題が目にとまりました。特に、池田アイソトープセンター長が述べられている「研究支援について」は、興味深く読ませて頂きました。工作センターを含む関連5センター(アイソトープ、加速器、低温、分析、工作)の統合についても触れられており、新センターが目指すべき方向性を的確に示されています。これら5センターは、設立当初から独自性を生かし、学内支援業務と研究活動を両立させて来ました。相次ぐ技官の定員削減と予算の縮少は、安全管理を伴

う日常サービス業務の継続さえ危うい状況に追い込むのではないかと懸念されています。今回の統合は、これらの困難さを克服し、新たな発展を期しての再編と思われます。関係者の英断に対して拍手をお贈りしたいと思います。

加えて、これまでの改組・転換の実現から、中長期の将来計画を述べられている八神生命科学動物資源センター長のお話にも興味を持ちました。同センターの改組の時期に研究審議会委員を務めていた関係もあって、センターの活発な活動は以前から承知していました。将来計画に対しても一部にPFI方式の導入等、時代の流れに即した柔軟な姿勢と具体性のある計画は確実に実行されるものと期待されます。当該分野が世界的に成長しているとは言え、関係者の不断の努力がセンターの成長を支えているものと思われます。

開学以来30年の間にセンターを取巻く環境は、著しく変化しました。研究設備が何もなかった「筑波」から何でも手に入る「つくば」に変わりつつあります。各センターの恒常的な成長を期待しております。

(あおき さだお/応用光学)